

「保育職のキャリア形成についてのアンケート調査」 報告書

日本子ども支援学会 2021年調査

目次

I. 調査概要	深谷野亜(松蔭大学教授)
II. 調査データから考える	
★「10年のキャリアで一人前」	深谷昌志(日本子ども支援学会会長)
★保育職としての悩み—自由記述から考える—	河村真理子 (日本子ども支援学会調査委員会委員長)
★同僚とのコミュニケーションについて—小学校教諭の視点から—	渥美卓哉(三鷹市立第六小学校教諭)
★情報化社会のなかでの保育職	大槻育子(東京学芸大学大学院)
★保育職として、グレーゾーンの子どもや発達障がいを持つ子どもをどう受け止めていくのか	河村 圭(育英幼稚園副園長)
★スキルアップ・キャリアアップ	金城 悟(東京家政大学教授)
★保育職としてのやりがい—自由記述から考える—	齋藤恵子(前貞静学園短期大学教授)

I. 調査概要

松蔭大学 深谷 野亜

日本子ども支援学会調査委員会が実施した本調査は、2018年度調査に続き、第二回目の調査にあたる。

日本子ども支援学会は2018年に、「子どもの放課後を復権し、子どもの遊び戯れる街角の再生のため、(中略)必要なのは子どもを指導することではなく、子どもを背後から支え大人の姿勢だと思います。そうした願いから日本子ども支援学会の設立」されたものである。この学会の特色の一つは、「子ども支援という心情で一致した研究者や実践家、そして、子どもの問題に関心を寄せる市民などが集い、童心に戻って語り合える場(学会HPより)」を意識して作られた点にある。実際本調査を企画・実施した調査委員会のメンバーは、大学の研究者・幼稚園教諭・保育士・小学校教諭・幼児教育専門家等、多岐にわたる。2021年に実施した調査は、月一回行われている調査委員会の会合において、昨今の子どもをとりまく環境の中で何が問題かを話し合い検討した結果行われたものである。

本学会の第一回調査(2018年度調査)は、新型コロナウイルス感染症(COVID-19以下、コロナと表記)の関係で結果の発表を予定していた日本保育学会第75回大会が中止となってしまった。また、調査員会のメンバーが勤務している教育機関も、急遽遠隔授業やコロナに適した(教室)環境整備といったコロナ対応に追われるなど、コロナに振り回された一年であった。第二回調査である今回は、コロナの影響は(一時期に比べれば)落ち着いた状況にある。しかし改めてコロナの影響を考えると、一点目としては、弱者であり、かつ無限の可能性を秘めた子ども達の成長に大きな負担となっている。このコロナの影響を受けた子ども達の成長への影響は、今後さらに検討をする必要があるであろう。もう一点として、コロナは特に保育職の方々への大きな負担をもたらすこととなった。乳幼児のワクチン接種やマスク装着は難しく、他の教育機関に比べて子どもとの距離が極めて近いことが、コロナ渦における保育職固有の難しさであろう。現在も、保育職の方々には、コロナ感染のリスクを抱えながら仕事に従事しているのが現状である。

医療関係者に対しては、早い段階から社会が「医療関係者の方への感謝を」と、お弁当や必要資材が寄付された。また2020年5月には、「医療関係者に感謝を」とブルーインパルス部隊飛行が実施された。しかし、医療関係者と同じようなリスクを抱えながら、社会に対して同じように重要に役割を果たしている保育職に対する社会的な評価はコロナ前とあまり変わっていないのが現状である。本調査を企画した段階では、コロナがこれほど長期的な影響をもたらすものであることも、また、コロナによってわれわれの生活がこれほど大きく変化することなど考えていなかった。そのため、今回の調査は保育職という職業の特徴なのか、コロナという状況下におかれた特徴なのか、判断がつかない部分があることを付け加えておく。

【調査概要】

調査実施時期:2021年11月～12月 園通しによる質問紙調査

調査実施園:首都圏近郊にある幼稚園22園・保育所12園・子ども園2園あわせて622ケース

※個人情報の取り扱いについては、松蔭大学研究倫理委員会の研究倫理についての承認を得て実施した。

【属性】

表1、今回の調査の年齢構成をみると、20代・30代が全体の5割を超えている。これを幼保別でみると年齢構成に違いがみられる。幼稚園教諭は全体の4割が20代であるのに対し、保育士は年齢層が高く、最大値は20代の26.2%となっている。性別については、幼稚園の97.1%に対し、保育所は92.0%と、保育所の方が男性の割合が高くなっている(表2)。また、表3の学歴別でみると、幼稚園は「幼児教育関係の四年制大学卒」、保育所は「幼児関係の短期大学卒」が多いのが特徴的である。表4は持っている資格についてであるが、余地園教諭の場合、全体の1割が小学校免許も所持している点が目に付く。

表1 年齢構成

(%)

	全体	幼稚園	保育所
10代	0.2	0.0	0.3
20代	30.1	42.3	18.4
30代	22.7	21.0	25.1
40代	23.0	20.2	26.2
50代	15.5	12.1	18.2
60代	6.6	4.0	8.6
それ以上	1.9	0.4	3.2

表2 性別

(%)

	全体	幼稚園	保育所
女性	94.0	97.1	92.0
男性	6.0	2.9	8.0

表3 学歴別

(%)

	全体	幼稚園	保育所
幼児関係の専門学校卒	20.8	12.9	27.5
幼児に関係しない専門学校卒	4.0	0.4	7.2
幼児関係の短期大学卒	36.1	32.3	36.5
幼児に関係しない短期大学卒	2.7	1.1	4.2
幼児関係の四年制大学卒	24.2	47.9	6.6
幼児に関係しない四年制大学卒	4.8	3.4	5.7
大学院卒	1.0	1.9	0.3

表4 所持している免許(複数回答)

(%)

	全体	幼稚園	保育所
幼稚園教諭免許	77.5	97.1	61.0
保育士資格	83.5	85.3	80.6
小学校教諭免許状	6.4	12.5	2.0
中学や高校の教諭免許状	2.6	2.6	2.6
心理系の資格	2.8	2.2	3.1
福祉関係の資格	8.6	6.2	10.0
子ども関係の資格	6.9	7.7	6.6

【幼稚園教諭・保育士になるまで】

子どもにとって遊びこそ学びである、とよく言われる。保育職に就いた人は、小学校の頃にどのような遊びをしていたのだろうか。表5は、小学校低学年までにした遊びについて「よくした」の割合をのせたものである。鬼ごっこやごっこ遊びは7割が「よくした」と回答しているが、自然遊び(虫取りや花摘み)を「よくした」とする割合は5割を切っている。自然遊びは決まった型がないために、子どもの空想力や好奇心、主体性が求められる遊びであり、子どもの成長にとってとても重要な遊びである。さらに子ども心を失ってしまった大人期に、新たに自然遊びをしても、自然遊びの面白さは感じ取りにくいものである。保育職の半数が、小さい頃に虫とりや花つみといった自然遊びをしていない点が気にかかる。

表5 小学校低学年までにした遊び

(「よくした」の%)

	全体	幼稚園	保育所
1. 絵本を読んだ	41.8	42.3	40.9
2. 虫取りや花つみをした	47.9	44.7	51.2
3. 鬼ごっこやかくれんぼをした	74.9	73.3	76.7
4. おままごとなどのごっこ遊びをした	71.5	73.6	69.1

「よくした」「わりとした」「あまりしたことがない」「ぜんぜんしたことがない」の4尺度で質問

表6は、小・中学校の育児体験について、「一回もない」の割合をのせたものである。少子化が進み、一人っ子や二人きょうだいが8割を超える中、育ちの中で、乳幼児と触れ合う機会が減少している。こうした傾向性は我が国に限ったことではなく、欧米を中心に早くからペアレンティング教育(親になるための教育)への取組がなされている。一方、日本の場合は昔のような「子どもを持てば、親性が湧いてくる・親らしくなれる」と考えるのか、親になるための準備教育を早期から行うという意識に乏しい。

例えば、小学校学習指導要領(家庭編)には、家族との団らんの大切さを理解することや異なる世代の人々との関わりについては挙げられているが、保育という視点は含まれていない。学校教育の学習内容に保育領域が含まれるのは、中学校指導要領(技術・家庭編)からである。

高等学校の家庭科で、ようやく(3)子供との関わりと保育・福祉が設定されているが、ここでの狙いは、

ア. 次のような知識及び技能を身に付けること。

(ア) 乳幼児期の心身の発達と生活、子供の遊びと文化、親の役割と保育、子育て支援について理解を深め、子供の発達に応じて適切に関わるための技能を身に付けること。

(イ) 子供を取り巻く社会環境の変化や課題及び子供の福祉について理解を深めること。

イ. 子供を生み育てることの意義や、保育の重要性について考え、子供の健やかな発達を支えるために親や家族及び地域や社会の果たす役割の重要性を考察するとともに、子供との適切な関わり方を工夫すること

(前掲書 55—56 頁)

とされている。そして、保育の指導に当たっては、幼稚園や保育所を訪問して子どもとの触れ合いや交流を行ったり、子育て中の親と子供を学校に招くことが、実践的・体験的な学習活動例として挙げられている。しかし実際の高校の家庭科の授業は、様々な制約があるため、デジタルコンテンツやロールプレイ、保育人形を使った疑似体験で授業が展開されることも多い。しかし、育児の難しさの1つは、子ども次第でいつ終わるかがわからない(いつ泣き止むのか、いつイヤイヤ期が終わるのか)点にある。どんなに退屈な授業であったとしても、90分たてば必ず終わるものであり、我慢もいや。しかし育児は期限が見えないだけに、余計負担感やストレスが大きくなる。この育児の特徴を考えると、学校に導入されている授業時間の区切りで終わる保育人形を使った疑似体験でどの程度育児の大変さが伝えられているのか疑問が残る。アメリカでは10代の妊娠が社会問題となって久しい。そのため、同じように保育人形を使った授業であっても、アメリカではより育児の大変さを感じられるような設定で実施されたりしている。例えば、一定時間誰もかまわないと泣いたり、ぐずったりする保育人形を、二人一組で一週間程度預かる。一人が部活をしている時は、必ずもう一人が保育人形を傍らにおいて勉強したりするが、その勉強の間もミルクを求めて泣いたり、おむつが濡れて泣いたりするために、勉強に集中することが出来ない、といった形で保育人形に振り回される一週間を送る。こうした経験を通じて、育児の難しさと親となることへの大変さを少しでも実感させ、結果的に十代の妊娠・出産に歯止めをかけるようにしているのである。

保育職を対象とした今回の調査でも、小中学校の頃、「おむつ交換をしたこと」は過半数、「赤ちゃんをだっこ」「1.2歳児の遊び相手をした」ことは2割が「一度もしたことがない」と回答している。少子化社会において、社会が適切な教育の場を設けない限り、実際親になったり保育職に就く前の乳幼児との実体験が非常に乏しいのが現状である。現在、幼稚園教諭・保育士養成課程のある学科に属しているが、オープンキャンパスの個人面談の時、なぜこの学科を選んだのかを尋ねると、きょうだいが多い等の実体験に基づき自分の適性を判断して選択をした、という理由を挙げる場合が多い。その反面、人間関係は得意ではないが(なんとなく)乳幼児なら相手にできるかなと思った、といった「子ども＝大人に比べてば対応が楽そうだ」といったふんわりしたイメージから学科を選択する

高校生も、一定数いるのが現状である。

少子化社会の中では、どうしても乳幼児との距離は遠くなってしまふ。これは保育職養成課程にいる学生でも同じことである。そのため保育職養成課程では、実習を重視してきた。しかしコロナ渦の現在、感染リスクをおさえるために、免許をとるために必要不可欠な実習でさえ、特例として学内で実施する演習で代替することも可能となっている。コロナ渦では一層、乳幼児との接触に乏しい状態で進路選択をする状態にあり、学生たちもいつも以上に、卒業後の進路選択に不安を感じているようである。このようにコロナの影響は、現在の幼児や保育職への影響だけではなく、保育職を希望している学生に対する影響も大きい。コロナ渦で学生生活をおくった世代(コーホート)の、就職後の離職率等が案じられる。

表6 小・中学校の頃の体験 (「一回もない」の%)

	全体	幼稚園	保育所
1. 赤ちゃんをだっこした	21.5	17.6	24.0
2. 赤ちゃんのおむつを替えた	56.3	54.2	57.3
3. 1. 2歳の子の遊び相手をした	20.2	17.2	22.7
4. 3. 4歳の子の遊び相手をした	13.7	10.6	15.5

「一回もない」「1.2回ある」「何回かある」「いつもしていた」の4尺度で質問

【保育職という選択】

表7は、就職する前の仕事の継続に対するイメージを尋ねたものである。少し意外な印象もあるが、「結婚するまで」とする割合は幼稚園教諭は全体の4割と最大値であるのに対し、保育士は「子どもができて仕事も続ける」と考える割合が3割で最大値となっている。

表7 就職前に考えていた就労計画 (%)

	全体	幼稚園	保育所
結婚するまで	28.8	36.3	21.9
子どもができるまで	15.3	18.0	14.1
子どもが出来たら一時休職し、その後復帰	24.4	24.7	23.8
子どもが出来ても仕事を続ける	20.4	11.6	28.3
適当なタイミングで他業種に転職	11.0	9.4	11.9

表8は、保育職を選んだ登記について「とてもそう」と「わりとそう」をあわせた%である。また、数値が高いため「子どもが好きだから」については()内に「とてもそう」の数値を掲載してある。保育職を選んだ理由で最も多いのが「子どもが好きだから」であり、「とてもそう」と「わりとそう」をあわせると共に95%を超えている。しかし「とてもそう」だけに絞った()付きの数値に着目すると、幼稚園教諭と保育士ではその数値に1割ほど開きが見える。この他、幼稚園教諭と保育士で差が大きかった項目は「定年まで働けそうだから」「いつでもどこでも仕事があるから」の二項目であり、保育士の方が10%以上高くなっている。

表8 保育職を選んだ動機 (「とてもそう」と「わりとそう」をあわせた%)

	全体	幼稚園	保育所
1. 定年まで働けそうだから	24.2	16.1	31.4
2. いつでもどこでも、仕事があるから	41.3	36.8	45.4
3. 子どもの扱いに自信があるから	53.7	56.6	53.7
4. 憧れの仕事だったから	79.9	85.4	76.8
5. 子どもが好きだから	96.7(69.1)	98.1(75.7)	96.1(64.4)

「とてもそう」「わりとそう」「あまりそうではない」「ぜんぜんそうではない」の4尺度で質問

※1. 子どもが好きだからについては()に「とてもそう」の%も記載

表9は、最初に勤めた園を選ぶ際に重視したことについて、「とても重視した」の割合をまとめたものである。幼稚園教諭と保育士で差が大きかった項目は「園の教育や方針」であり、「とても重視した」割合は幼稚園教諭が42.8%であるのに対し、保育士は15.4%と大きな違いがみられる。幼稚園教諭・保育士ともに、最も重視した項目は「園の雰囲気」であるが、幼稚園教諭は2位が「園の教育や保育の方針」3位が「待遇(給料)」であるのに対し、保育士は2位が「待遇(勤務時間)」、3位が「待遇(給料)」となっている。

表9 最初に勤めた園を選ぶ際に重視したこと (「とても重視した」の%)

	全体	幼稚園	保育所
1. ネットなどに書かれている園の口コミ	3.2	1.9	3.4
2. 待遇(給料)	20.6	22.5	18.4
3. 待遇(勤務時間や勤務日数等)	24.5	21.8	25.9
4. 園の教育や保育の方針	27.5	42.8	15.4
5. 園の雰囲気	49.0	57.4	41.0

「とても重視した」「わりと重視した」「あまり重視しなかった」「ぜんぜん重視しなかった」の4尺度で質問

【保育職としての自己評価とスキルアップ】

では、保育職としてどのように自己評価をしているのであろうか。まずは、知識面からみていくことにする。表10は、保育職として携わるにあたり、必要な知識といえる7項目をあげ、「とても理解している」「わりと理解している」と回答した割合をまとめたものである。子どもと接するうえで実際に必要となるであろう「発達障がいの知識」「アレルギーの知識」「震災時の知識」においては6割が「とても理解している」「わりと理解している」と回答しているものの、「日本以外の文化圏で育った子どもへの対応」は2割、「子どもの貧困」については3割しか理解していない。

表10 次のような知識をもっているか (「とても理解している」「わりと理解している」をあわせた%)

	全体	幼稚園	保育所
1. 日本文化圏外で育った子どもへの対応	20.5	19.4	21.0
2. 子どもの貧困についての知識	30.7	26.4	35.1
3. デジタル機器を活用すること	33.5	32.7	34.9
4. 児童虐待の知識	53.2	52.4	71.9
5. 発達障がいの知識	62.2	61.5	62.2
6. アレルギーの知識	63.8	56.9	68.2
7. 震災時の対応	68.4	66.9	67.3

「とても理解している」「わりと理解している」「あまり理解していない」「全然理解していない」

また、表11は、これから身につけたいと思う知識について、いくつでも○をしてもらったものであるが、「発達障がいの知識」は4割が身につけたいとしているが、それ以外の6項目については、およそ2割しか○がつかなかった。

表11 これから身につけたい知識(複数回答可) (%)

	全体	幼稚園	保育所
1. 子どもの貧困についての知識	19.6	20.1	18.2
2. 震災時の対応	21.1	26.7	16.5
3. デジタル機器を活用すること	21.7	22.3	19.9
4. アレルギーの知識	23.6	27.5	19.4
5. 日本文化圏外で育った子どもへの対応	23.6	28.2	19.1
6. 児童虐待の知識	23.7	26.4	20.8
7. 発達障がいの知識	42.4	48.7	37.6

次に、保育職としての現在のスキルについて、どのように評価しているのでしょうか。表12は「とても得意」と「わりと得意」を合わせた数値がのせてある。全体の傾向を見てみると、「楽器演奏」や「表現活動」といった個人差がでやすい保育スキルに対して苦手意識が高いことが分かる。また、「保育日誌の書き方」についても、6割が苦手と感じているようである。養成校においても、保育日誌が上手く書けるように指導している。しかし養成校のカリキュラム以上に、情報化社会の中での育ちが大きく影響を与えているように感じている。動画の中で育った世代は、学校での勉強以外、小説や新聞など長文を読むことをあまりせず、読解力や語彙力に乏しい者も多い。また、学生との連絡についても、文章でやりとりをするメールではなくLINEでしてほしい、というリクエストも多い。LINEでのやりとりはスタンプなども用いながら、短文でのキャッチボールが続いていく。LINE文化の中で育った学生は、課題レポートでも、一文ごとに改行したり、句読点をつけずに文章を書ききるなど、学生の文章の中にLINEの癖を見て取ることができる。預かった幼児の日常を保護者に伝える保育日誌は、保育職にとって重要である。しかし、長文の読み書きをあまりせずに育った者にとって、「保育日誌の書き方」に苦手意識をもつのはある意味当然なのかもしれない。

表12 保育職として、自信があるスキル (「とても得意」と「わりと得意」を合わせた%)

	全体	幼稚園	保育所
1. ピアノなどの楽器演奏	34.5	38.7	30.2
2. 保育日誌の書き方	37.2	36.3	36.8
3. ダンスや絵画など表現活動の手段	38.4	43.1	34.6
4. カリキュラムや活動内容を考える	42.8	46.7	37.3
5. 保護者とのコミュニケーション	55.6	56.0	55.5
6. 子どもの異変に気付く	82.5	82.3	82.1
7. 子どもへの対応	84.2	85.3	82.5
8. 子どもの意思を尊重する	89.0	90.1	87.4
9. 絵本・紙芝居等の読み聞かせ	84.2	86.0	81.9

「とても得意」「わりと得意」「やや苦手」「苦手」の4尺度で質問

表13は、これからスキルアップしたいと考える項目について、いくつでも○をつけてもらったものである。全体の数値でみると、一番スキルアップしたいものは「保護者とのコミュニケーション」で3人に1人が○をつけている。また、表12でみたように、苦手意識が高い「保育日誌の書き方」についてスキルアップをしたいとする割合は15.6%と低い点が目につく。

表13 これからスキルアップしたいと考えているもの (複数回答可・%)

	全体	幼稚園	保育所
1. 絵本・紙芝居等の読み聞かせ	9.8	11.7	7.7
2. 子どもの異変に気付く	13.9	16.5	11.7
3. 保育日誌の書き方	15.6	15.8	15.1
4. 子どもの意思を尊重する	15.8	19.4	13.1
5. ダンスや絵画など表現活動の手段	18.2	20.9	15.4
6. ピアノなどの楽器演奏	25.6	32.6	19.4
7. カリキュラムや活動内容を考える	25.9	33.3	20.2
8. 子どもへの対応	26.0	28.6	24.5
9. 保護者とのコミュニケーション	31.9	39.9	25.4

表14は現在の職場は、スキルアップやキャリアアップする環境がどの程度整えられているかを「非常にそう思う」と回答した割合をまとめたものである。現在、保育所については処遇改善につながる(外部)研修が充実しているが、幼稚園の場合にはそうした社会的なシステムは整備されておらず、それぞれの園毎に、自分の園の教育理念に沿った教諭を育てようとする意識が強いように思われる。

実際こうした環境の違いが影響しているのか、幼稚園教諭と保育士では回答にかなり違いがみられる。幼稚園の場合、「子どもの情報共有ができて」「悩んだ時、助言をもらえる環境ができて」という評価が高く、「保育スキルを高めたい」という意欲が強いことが特徴的である。

表14 現在の職場環境や今後のスキルアップについて (「非常にそう思う」の%)

	全体	幼稚園	保育所
1. 将来役職に就きたいと考えている	3.1	1.9	4.4
2. あなたの勤務先は「キャリアアップ」できる情報が整っている	21.2	15.4	25.1
3. 現在の自分の保育スキルを高めたいと考えている	40.2	45.6	36.4
4. 担当する子どもの情報について、職場で共有できる環境になっている	42.8	48.9	36.5
5. 子どもへの対応で悩んだ時、園内に相談や助言をもらえる環境になっている	44.3	49.3	37.1

「非常にそう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「全くそう思わない」の4尺度で質問

【保育職としての現在】

表15は現在の体調についてである。「元気がいっぱい(80.4%)」「やりがいを感じてる(86.0%)」がいる。その一方で、4人に1人が「ゆううつだ(25.1%)」「よく眠れない(25.2%)」と回答していることが非常に気がかりである。

表15 現在の体調 (「とてもそう」と「わりとそう」をあわせた%)

	全体	幼稚園	保育所
1. ゆうつだ	25.1	24.0	25.5
2. よく眠れない	25.2	26.2	23.9
3. なんとなくイライラしている	25.7	27.1	24.7
4. 目標をもって生きている	58.1	63.1	53.4
5. 元気いっぱい	80.4	85.6	76.4
6. 仕事にやりがいを感じている	86.0	90.4	82.3

「とてもそう」「わりとそう」「あまりそうではない」「ぜんぜんそうではない」の4尺度で質問

では具体的に、どのようなことに負担感を感じているのでだろうか。表16は、現在負担に感じていることについて「とても負担に感じている」と「わりと負担に感じている」を合わせた数値がのせてある。1番負担感を感じているのは「保育日誌などの文章作成」で、次いで「情報機器を使いこなす」で両項目とも過半数が負担感を感じていることがわかる。その一方で、「子どもの扱い方」について負担感を感じているのは全体の2割と最も低いことが目に付く。

表16 現在負担に感じていること (「とても負担に感じる」「わりと負担に感じる」を合わせた%)

	全体	幼稚園	保育所
1. 子どもの扱い方	18.5	18.1	19.7
2. 保護者とのコミュニケーション	42.8	44.7	42.4
3. 職場の同僚との人間関係	42.9	45.1	43.1
4. 情報機器を使いこなす	51.2	49.5	53.2
5. 保育日誌など文書の作成	55.6	53.9	58.1

「とても負担に感じる」「わりと負担に感じる」「あまり負担に感じない」「全く負担に感じない」の4尺度で質問

【コロナ対策について】

コロナ対策についてみることにする。表17は現在コロナ対策として「している」とする割合をまとめたものである。どの項目も8割以上が実施していると回答しているが、中でも比較的少なかった項目は「園児にマスクを着用させる(80.9%)」であり、特に保育所の場合は72.6%となっている。乳幼児のマスク着用については、窒息や熱中症のリスクが高まることから、厚生労働省は2歳児未満についてはマスクを着用させないように呼びかけをしており、保

育所に対しては子どもの発達状況に個人差が大きい「一律にマスクを着用することは求めない」といった対応をしているため、幼稚園と保育所では差が出るのは当たり前といえる。しかし、保育職の場合は子どもとの距離が近いこと、特にコロナ渦においては大きなストレスを感じることにつながるのではないだろうか。

表17 コロナ対策(1)実施しているか (「している」の%)

	全体	幼稚園	保育所
1. 園児にマスクを着用させる	80.9	98.6	72.6
2. 飲食の前に丁寧に手洗いをさせる	97.8	98.6	97.2
3. 食事やおやつを無言で食べる	90.0	92.5	89.9
4. 遊具や絵本をアルコール消毒する	97.0	94.4	98.3
5. 定期的に部屋の換気をする	97.8	98.1	97.5
6. 密にならないような配慮	87.3	91.6	84.7

表18は、表17で、「している」と回答した者を抽出した上で、なにが負担だと感じているか「とても負担」「わりと負担」をあわせた数字をのせてある。もっと低かった項目は「飲食の前に丁寧に手洗いをさせる」ことで8.8%となっている。この食事前の手洗いについては、コロナでなくても日常的に指導しているため、負担感を感じる割合がもっとも低い。逆にコロナでなければなくてもいい作業である「遊具や絵本のアルコール消毒」は55.9%、常日頃の指導とは逆の「食事やおやつを無言で食べさせる」ことは55.6%と、コロナという特殊な状況が、一層負担感を感じられていることがわかる。

表18 コロナ対策(2)負担に思うか (「とても負担」「わりと負担」をあわせた%)

	全体	幼稚園	保育所
1. 園児にマスクを着用させる	36.3	51.8	37.6
2. 飲食の前に丁寧に手洗いをさせる	8.8	11.2	8.8
3. 食事やおやつを無言で食べる	55.6	71.8	55.1
4. 遊具や絵本をアルコール消毒する	55.9	54.4	54.2
5. 定期的に部屋の換気をする	19.9	24.1	20.1
6. 密にならないような配慮	57.6	68.1	53.6

「とても負担」「わりと負担」「あまり負担はない」「負担ではない」「していない」の5尺度で質問。この数値は母数から「していない」と回答したものを除外し集計した

【最後に】

ここまで保育職のおかれている状況について概括してきたが、現在のコロナ渦における保育は、保育職が潜在的に抱えていた問題が表出しやすい状況にあるように感じた。表19は、保育職の現状について「とても当てはまる」と「わりと当てはまる」をあわせた数値をのせたものである。最も割合が高かった項目は「給料が低すぎる」の89.9%であり、ついで「保育という仕事に対する社会の理解や評価が低い」の83.0%となっている。こうした待遇に対する不満が高い中、それでも保育職を続ける大きな理由は、「やりがい」であろう。

表19 保育職について感じる事 (「とても当てはまる」「わりと当てはまる」をあわせた%)

	全体	幼稚園	保育所
1. 保育職はやりがいが感じにくい	15.4	10.4	18.7
2. 行政は、幼児教育の向上に力を入れていない	16.4	10.8	20.0
3. キャリアアップの道筋がみえない	56.6	62.6	50.4
4. 保育という仕事に対する社会の理解・評価が低い	83.0	85.1	80.9
5. 給料が低すぎる	89.9	84.1	78.1

次の表 20 は仕事に対するやりがいを探ったものである。表 15 でみたように、保育職の方々の 4 人に 1 人が、憂鬱さや夜寝付けない、といった心身の不調を感じており、表 19 で見たように、全体の 8 割が給料が低すぎると感じているが、それにもかかわらずこの仕事を続けている理由の一つが、仕事に対するやりがいではないだろうか。表 20 は、仕事にやりがいを感じているかどうかを 4 尺度で尋ねた結果である。自分の仕事にやりがいを「非常に感じる」が 51.4%、「どちらかといえば感じる」が 45.8%と、95%以上と、ほとんどの人が仕事にやりがいを感じていることがわかる。

表 20 仕事にやりがいを感じているか (%)

	全体	幼稚園	保育所
非常に感じる	51.4	60.7	44.8
どちらかといえば感じる	45.8	38.2	50.6
どちらかといえば感じない	2.4	1.1	3.7
全く感じない	0.5	0.0	0.9

また、表 21 は、10 年後を想像することがあるかをたずねたものである。「自分が 10 年後にどのような役職についているか」は 1 割しか考えることはなく、「10 年後に自分が保育職としてどのくらい成長しているか」についても 24.1%しか想像することはないと回答している。こうした自分の 10 年後を考えるよりも、「担当する子どもがどのような大人に成長しているか」については過半数が想像することがあると回答しているのである。

表 21 今から 10 年後を想像するか (「よく考える」の%)

	全体	幼稚園	保育所
1. 今から保育職として、10 年後どのくらい成長しているか	24.1	24.9	24.0
2. 10 年後、自分がどのような役職についているか	10.0	9.6	10.6
3. 担当する子どもたちがどのような大人に成長しているか	53.6	59.3	48.5

「よく考える」「時々考える」「考えたことがない」の 3 尺度で質問

今回の調査では、さまざまな困難さを感じていながらも、仕事に対してやりがいを感じてがんばっている保育職の方々の姿がうかびあがってきた。しかし同時に 4 人に 1 人が、憂鬱さや寝れないといった状態にあるといったことは、とても憂慮すべきことである。

保育職や教育職は、虚しさを感じやすい仕事でもある。その子どもを担当する間、どんなにがんばり子どもの成長に尽力したとしても、時が来れば子どもは自分から新しい環境への巣立っていってしまう。しかし自分はいえ、同じ場所で、また同じ年齢の子どもを迎え、また 1 から支援がスタートするのである。迎える⇒育てる⇒卒業させる⇒再び迎える、といったサイクルの繰り返しは、特に子どもの成長を第一に考え、仕事にまい進するものほど「自分はいったい何をしているのだろう」と虚無感に陥りやすい。

こうした仕事の特性がもたらす空虚さを補うもの 1 つは、やはり自分自身の成長ではないだろうか。3 月に子どもを卒園させた後、再び 4 月は巡ってくる。しかし自分も成長していれば、例えば、新しく入ってきた子ども達について、以前の自分では気が付かなかった視点でとらえることができるだろう。自分自身が成長することで、今までしてきた当たり前の保育/教育が違ったものに見えてくる。違ったものに見えてくることで、自分自身の新たな課題もみえてくることであろう。今回の調査では、「今から保育職として、10 年後どのくらい成長しているか」について「よく考える」ものは全体の 4 分の 1 にとどまっている。確かに保育職・教育職というものは、利他的な仕事でもある。しかし、時に自分自身の成長や生き方を考えることも重要なのではないかと感じた。

深谷野亜:松蔭大学コミュニケーション文化学部子ども学科教授。松蔭大学学生相談室長。専門:教育社会学
保育職養成課程・中学校・高校の教職課程に携わっている。望月重信他編「日本の教育を捉える」(学文社)他

II. 調査データから考える

★「10年のキャリアで一人前」

深谷 昌志(日本子ども支援学会会長)

教育学部に勤務していたので、長い期間、小学教員の養成に関わり、多くの教え子を教育界に送り出してきた。それだけに、教員の世界に通じているつもりだが、「十年選手」という用語が流行ったことがある。教師になって10年、どうやら一人前の教師になれたという感慨を含んだ言葉だ。そうした感覚なので、教職5年で半人前、2.3年はミソッカスとなる。

それだけに、学校内でベテランの先生が若い教員の面倒を見るのが一般的だった。教材作りを手伝う。指導案を助言する。そうした行為は自分も先輩教師からしてもらったから、自分も順送り、後輩の世話をする。教員世界に見られる美風であろう。

しかし、本調査の結果によれば、保育職の場合、2.3年で退職する保育者が多いという。これでは保育の場がピギナーで占められ、質の高い保育を期待できない。子育てを終えた有資格者の積極的な再雇用など、質の高い保育を目指す方策を講じる必要性を感じた。

深谷昌志:東京教育大学大学院博士課程修了。教育学博士。放送大学や静岡大学教授などを歴任、東京成徳大学名誉教授。教育社会学専攻。日本子ども社会学会名誉会員。「昭和の子ども生活史」(黎明書房、2007年)、「日本の母親再考」(ハーベスト社、2011年)他

★保育職としての悩み—自由記述から考える—

河村真理子(日本子ども支援学会調査委員会委員長)

どのような職業にも悩みはあろう。保育職の悩みはどこにあるのか。12.の「やりがいがあると感じる」項目が「非常に」と「どちらかといえば」を加えると97.2%で、大半の人がやりがいを感じているにもかかわらず、33.では「やめたい」と思ったことがある人が80%近くいた。ほとんどのの方が書き込んでくださるといふ保育職者の真摯な姿勢を大切に、「悩んでいること」についての自由記述から少しでもその要因に近づけたらと思う。悩みを大きく「待遇」・「人間関係」・「苦手感」にわけてみる。

まず、待遇面では、「給料が安い」「仕事量が多い」「仕事量と給料の割が合わない」「持ち帰る仕事が多い」「労働時間が長い」など、社会的にも取り上げられている課題は、実際に現場の声にも顕著に表れている。29.の項目でも、「給料が低すぎる」と8割近くが答えている。この悩みに関しては経営側の行政への働きなどに期待する。「子どもに対する保育士の数が法的に合っても実際に子どもを見るためには足りない」悩みも、「子どもを安全に守ることへの危機管理意識が強くなっている」現状中、昨今の保育所での問題解決のためにも、法的な人数が実態と合っていないことを再考されるよう、現場から訴えていきたいことの一つかもしれない。

人間関係においては、「コロナ禍で、プライベートで会ったり食事したりできなくなって、お互いを知る機会が減った」ことによるコミュニケーション不足が人間関係に及ぼす影響は少なからずあろう。経験年数の違う相手との距離感や接し方は、双方共教育現場の者であるので気を使い合っているようであるが、若手からは、「上司との関係」「ベテラン保育士が権力を持ちすぎる」「言いたいことが言えない」、ベテランからは「後輩へのアドバイスの仕方」「中間管理職のつらさ」「若手の伸び悩み」「若手のフォロー」等があげられている。保育所ではパートの職員の立場の難しさがみえる。

苦手なことに関しては、不平不満というよりも向上心があるが故の悩みが大半であった。「問題を抱えている子の対応や気持ちを考えること。また、その保護者に対して親の気持ちを尊重しながら、現状や今後の課題を伝えること。」というように、いかに子どもに寄り添い理解し、その子どもの抱える課題に真剣に向き合っていこうとするからその悩みが見えてくる。

「ピアノが苦手」「絵画指導をもっと出来るようになりたい」「遊びの幅を広げたい」「学んだスキルを發揮できていない」「保護者への対応をもっと上手にしたい」、などの悩みからは、より良い保育者になりたいという思いがみえる。現場に即したスキルアップへの研修制度なども見直されることを期待したい。

デジタル化に伴う悩みも多い。効率向上の理由からも日々進化している機器の導入が進んでいるが、24.「デジタル機器を活用すること」への理解は7割近くが「理解していない」と答えている。「使いこなせない」「不得意」「苦手」という人が多いことから、普及するためにはその使い方を丁寧に指導することも求められよう。

その他として、「子育て」や「介護」など「家庭との両立」の悩みも見逃せない。「発達障害の子どもとの関り」、「体力の不安」、「保護者とのトラブル」等、悩みは多岐にわたる。保育職の仕事に極めようとするれば、課題は果てしなく広がる。待遇面での不満を持ちながらも、向上心ゆえ悩み、葛藤しながらも、子ども達の成長に関われる奥深いやりがいのある仕事を続けている実態がみえる。このような保育者が、29.「保育という仕事に対する社会からの理解。評価が低い」と多くが感じていることを重くとらえたい。忙しい中、調査にご協力いただいた有能な保育者が悩みながらも、子ども達のために奮闘している現状を、これらの結果をもとに、社会に発信出来たらと考える。

河村真理子:学校法人育英幼稚園園長。現場の教育を伝えるため、東京成徳大学・東洋英和女学院大学にて非常勤講師を務めた。共訳絵本「おじさんと石」(StLuke's)共著「絵本で育てるソーシャルスキル」(明治図書)他

★同僚とのコミュニケーションについて —小学校教諭の視点から—

渥美 卓哉

今回の調査を通じて、保育者である先生方の保育に対する熱意と向上心の高さが明らかになった。一方で、それとは裏腹に保育職に対して自信が持てないことや職場の人間関係、後輩指導などの人材育成に悩む現状が浮かび上がってきた。そこには小学校と同じように保育の現場でも様々な要望が高まり、多岐にわたる業務に振り回され、自身の保育について振り返ることもなく日々が過ぎ、同僚とのコミュニケーションを深めづらい状況があるのではないだろうか。それ故に職場において職員の相互理解が進まないということもあるだろう。「がんばっているのに評価されない」そんな言葉も出てきてしまう先生も少なくないのではないかな。

本コラムでは、先生方が互いに理解を深め、よりよい保育を実現するための2つの視点を、今回のアンケートをもとに述べていきたい。保育に携わる先生方が、より力を発揮できる一助となれば幸いである。

1. 保育者の誰もが同じ思いを抱いている)

まず、今回の調査で先生方が共通して認識してほしい結果がある(表2-1)

表2-1 保育職としてのやりがい

あなたは保育職としての仕事に「やりがい」を感じますか。	肯定的回答	97.2%
-----------------------------	-------	-------

今回の調査総数653(幼稚園217、保育所372)のうち97%というのは保育界にとってとても意義のあることである。そして、これは年齢や立場などで偏りが無い。今回の調査の分布を見てほしい(表2-2)。

表2-2 属性

勤務年数	10年以内	45%	年代	10代	20代	30代	40代	50代	60代	それ以上
	10年以上	55%		0.2%	30.1%	22.7%	23.0%	15.5%	6.6%	1.9%
			53%			45.1%				

図2-1 やりがいを感じていること(自由記述から)

■名詞	スコア	出現頻度
子ども	1837.89	581
成長	749.09	293
保護者	81.90	117
笑顔	54.80	69
行事	190.99	59
感謝	31.74	46
やりがい	204.96	45
卒園	24.50	35
日々	30.97	33
一緒	4.62	33

さらに、先生方は誰もが「子どもの成長」に目を向け、子ども達の変容を見取ることができている。左図は、「保育職として、やりがいを感じることはどんな時か」の自由記述による446の回答をテキストマイニングにかけ、頻出した単語を出した結果である。上位10単語を表したものであるが、「子どもの成長」が先生方の「やりがい」であることは明らかである。また、記述内容から日々の保育や、行事を通して、子どもたちの変容が見られることにやりがいを感じているようである(図2-1)。

これらの結果から言えることは、どの保育現場でも保育・教育に一枚岩となって取り組む土台がしっかりあるとい

うことである。しかし、今回の調査から保育現場では、雇用形態によって遠慮してしまったり、仕事の進め方について食い違いが出てしまったりするなどうまくコミュニケーションがはかかれていないとの意見が多く出ていた。では、保育現場でどのようなコミュニケーションを図っていくことが必要なのだろうか。

2. 互いに保育の専門的なフィードバックをする ～「先生の手立て」と「子どもの変容」の一体化～

先生方のやりがいは高い数値だったが、一方で先生方の保育職に対する自信のなさが調査から伺えた(表2-2)。

表 2-2 保育職としての自信

保育職としてみた場合、ご自身に自信がありますか。	肯定的回答	36.8%
--------------------------	-------	-------

これは、保育現場でコミュニケーションがうまくいかず、互いに適切な「評価」をすることができていなかったり、自身の保育について適切に評価される機会が少なかったりするのではないかと考えられる。

先生方は、「子どもの成長」にやりがいを感じている。ということは、教師としての私もそうであるが、自分が行った援助や支援が、子どもの成長につながったと認められることが一番うれしいのではないだろうか。他者から評価されることで自信につながる。そして、自分が取り組んだことがそれで良いのか、改善が必要なのかは、「他者評価」があってこそ認識が深まるものである。つまり、コミュニケーションが図れていないと「他者評価」が得られず、なかなか自信はついていかない。では、どのようなコミュニケーションをとっていくのがよいのだろうか。

そこで大切になるのは、先生が行った「手立て」と「子どもの変容」をセットにしてフィードバックすることである。例えば、私自身も行事練習の際、後輩に「〇〇くんが自分から動くか迷っているのに気付いたとき、よく見守ったね。〇〇君が動いた後にすぐに声をかけて褒めたのは彼の自信になったと思うよ。」と、ふとした瞬間の出来事を短い言葉で伝えている。先輩の立場であれば、それは後輩への的確な指導になる。後輩の立場からであれば、新しい気付きとともに、自身のスキルの向上にもつながる。日々の業務では、仕事の進め方や段取りに意識がいてしまいがちである。しかし、先生方の実践と子どもの成長について互いに伝え合うことで保育・教育観の共有につながり、相互理解を深め、働きやすい関係を築いていくことにつながっていくのではないだろうか。忙しい中でも専門家としての意識を高め、保育について伝え合い、互いに自信をつけて、先生方がよりよい保育・教育を実践してくことを願っている。

渥美卓哉:三鷹市立第六小学校所属。民間企業から転職し、不登校や発達障害児の個別支援教育に携わった後、現職。通常級に10年在職し、現在知的固定学級で指導を行っている。

★情報化社会のなかでの保育職

大槻 育子

保育職として働かれる方々の環境整備について考えていくにあたり、今回の調査で、保育現場のICT化に関する項目をお聞きしました。現在、負担に感じていることをお伺いした中で「情報機器を使いこなす」について伺ったところ、「とても負担に感じる」が16.6%、「わりと負担に感じる」が34.6%、「あまり負担に感じない」が37.3%、「全く負担に感じない」が11.5%と、負担に感じる方々が半数超おられました。また「デジタル機器を活用すること」についての知識はどのくらいあるかについて伺ったところ、「とても理解している」が6.1%、「わりと理解している」が27.4%、「あまり理解していない」が54.1%、「全然理解していない」が12.4%と、理解している方々は3割程という結果でした。今後身につけたい知識として「デジタル機器を活用すること」を選んだ方々は21.7%と、約5人に1人の割合でおられました。保育職として悩んでいることの自由記述の中にも、「パソコン・情報機器が苦手な為に操作が遅く、時間がかかってしまう」「パソコンでの仕事が多くなっているが使いこなせず、教えてもらうのも言いづらい」「情報機器が使いこなせない、難しくて覚えられない」といった記述が見られました。一方、「情報機器を取り入れて、文書作成などの負担を減らしたい」という記述も見られたことから、保育職の業務負担軽減を実現するためには、ITスキル向上のための、保育職に向けたICT教育の必要性も考えられます。

大槻育子:東京学芸大学大学院修士課程(教育 AI 研究)・日本子ども支援学会調査研究委員会委員
こども支援士(アフタースクール)

★保育職として、グレーゾーンの子どもや発達障がいを持つ子どもをどう受け止めていくのか 河村 圭

今回の調査では、「11. 自分の課題だと思う保育スキルがありましたら、お書きください。」「15. 今、保育職として悩んでいることがあれば、自由にお書きください。」の中で、発達障がいやグレーゾーンの子たちへの対応への悩み・保護者への伝え方の難しさについて挙げている例があった。また、24.「現在の知識」の中の「2. 発達障がいの知識」では、半数以上の方が「とても理解している」「わりと理解している」につけているにもかかわらず、24.「今後身につけたい知識」では、4割以上が「発達障がいの知識」を身につけたいと答えている。

まず、保護者の理解についてであるが、「障害者差別解消法」が施行されたのが平成 28 年であり、その頃から各メディアを通じて認知がされるようになってきた。保護者が子どもの頃には、「発達障がい」などは、あまり世間に知られていなかったわけではない。今も保育者にとっては認知されているが、保護者にとっては、当事者にならないと深く学ぼうとしないジャンルであるように思える。

医師や保護者も様子を見ることが多く、5 歳までに ASD や ADHD などの診断を受けている子はほとんどいないのではないだろうか。そういう意味では、みんな「グレーゾーン」である。園で、担任が一生懸命対応しても理解が得られず、小学校に入って学習が始まってから、やっと子どもの特性に向き合うようでは、保育者はやっていられない。

大学や短期大学などの養成校で「特別支援教育」について学んできているが、いざ現場に出てみて、もっと知識や技術が必要になると感じているからこそアンケートのような結果が出ているのではないだろうか。まだまだ新しいジャンルではあるので、学び続ける必要があるのは確かだが、保育者の悩みはそこにはないのかもしれない。

幼稚園・保育園・子ども園などでは、集団生活がベースになる。グレーゾーンの子の多くが、社会性・コミュニケーションに課題を持っていると考えられる。その子たちには、個別または、小集団で対応していくことが効果的ではあるのだが、集団生活がメインの幼稚園・保育園・認定こども園等ではそれが難しい。家庭や療育施設などでのアプローチになるので、家庭での理解が必要になるが、なかなかそれを理解してもらえないのが現状のようである。

平成 28 年 4 月 1 日から「障害者差別解消法」が施行され、それに伴い東京都では平成 28 年度以降、準備の整った自治体から特別支援教室を順次導入し、全ての小学校で導入をしている。平成 28 年から本格的に配慮が必要な子へのアプローチを始めている小学校以降の学校に比べ、その前段階である幼稚園・保育園・子ども園などの対応は、異なるものである。

平成 30 年に行われた、ベネッセ教育総合研究所による「第3回 幼児教育・保育についての基本調査」の中に「特別支援を行う体制」の中で「Q その園児の支援のためにどのような体制をとっていますか」というものがある。国公立幼稚園の 42.3%、公営保育園の 25.9%、公営認定こども園の 27.9%が「自治体が雇用した要員が派遣されている」と答えているのに対し、私立幼稚園が 1.3%、私営保育園が 1.1%、私営認定こども園が 0.4%である。「クラス担任をもたないフリーの保育者や園長、主任が対応している」と答えているのが、国公立幼稚園 31.3%、公営保育所 19.5%、公営認定こども園 19.9%に対し、私立幼稚園 57.7%、私営保育所 28.5%、私営認定こども園 38.4%となっている。

今回アンケートをとった園のほとんどが私学・私営の園であるので、表の中の「自治体が雇用した要員が派遣されている」園は少なく、多くの園が「クラス担任をもたないフリーの保育者や園長、主任が対応している」もしくは、担任・副担任がどうにかして対応しているのではないだろうか。

どうしても私学が多い幼稚園・保育園・子ども園などには、補助金などは出るが、配慮が必要な子のための要員が自治体などから派遣されてくることはほとんどない。小学校にも同じことは言えるが、在籍人数として圧倒的に公立に通っている児童の方が多く、ほとんどの公立には特別支援教室という受け皿がある。国立・私立に入学する場合は、入学テストを受ける。グレーゾーンの児童が私学に入る場合もあるだろうが、入学テストをしてまで入れているのだから、受け入れる準備が整っているであろう。

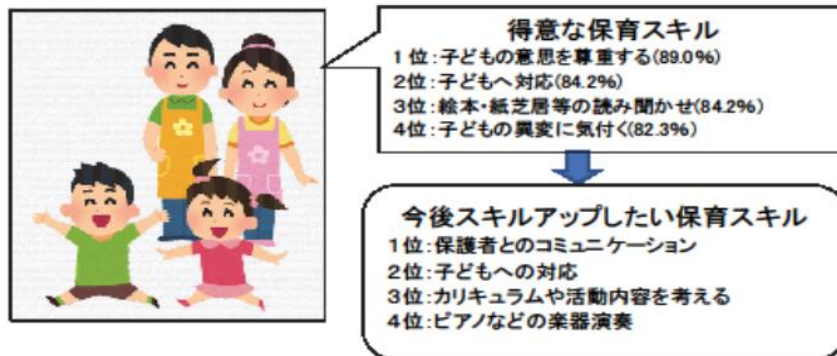
それと比べて、幼稚園教諭・保育士不足が問題となっている昨今、どこの幼稚園・保育園・子ども園等も人手不足気味である。その中で配慮が必要な子に満足いくような支援をしていくのは、至難の業である。特別支援教室とまではいわないが、幼稚園・保育園・認定こども園等にも支援をもっと増やしていく必要がある。

参考資料:ベネッセ教育総合研究所(2018)「第3回 幼児教育・保育についての基本調査」

河村圭:育英幼稚園理事長・副園長。東京未来大学非常勤講師。特別支援教室巡回相談心理士として、都内の小学校の特別支援教室にかかわった。特別支援教育士。共著『イラスト版感情力をアップする本』(合同出版)他

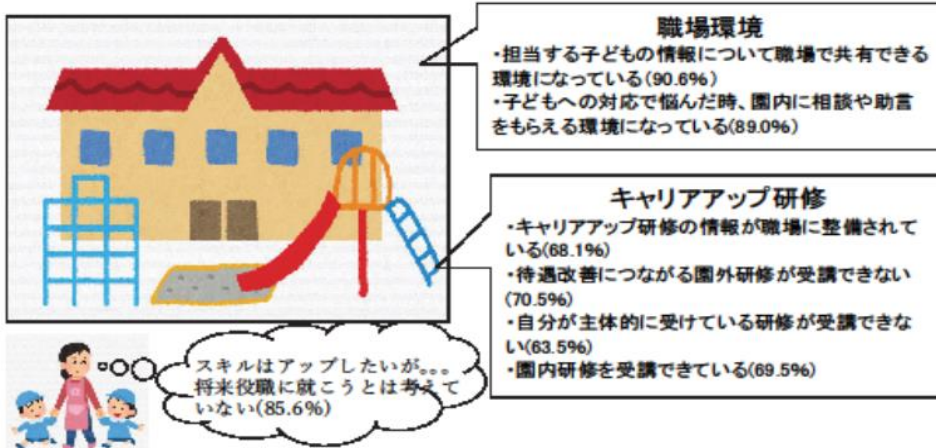
1. 保育者の得意な保育スキルとスキルアップしたい保育スキル

1. 保育者の得意な保育スキルとスキルアップしたい保育スキル



保育者の約9割は自分の保育スキルを高めたいと思っている！

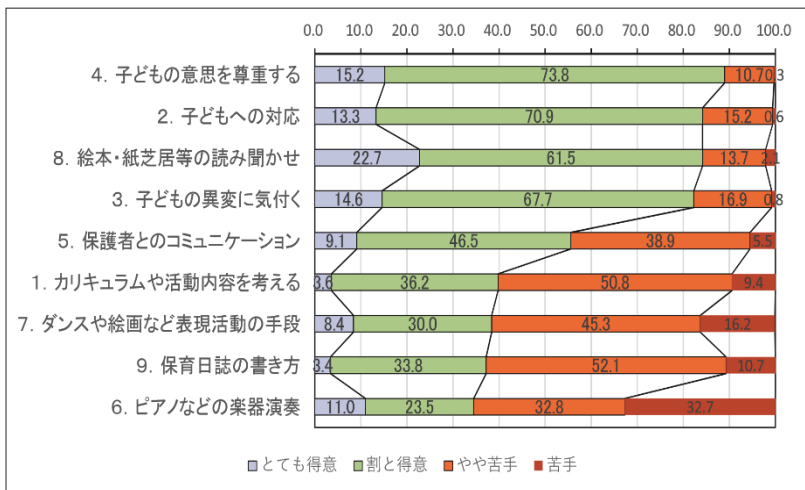
2. 保育者のスキルアップ・キャリアアップに関わる園環境と研修体制



保育者の約9割は保育スキルのアップには研修の受講が必要だと感じている！

今後の課題⇒①保育スキル・キャリアアップ研修受講の体制作り
②自園におけるキャリアアップの道筋の明確化

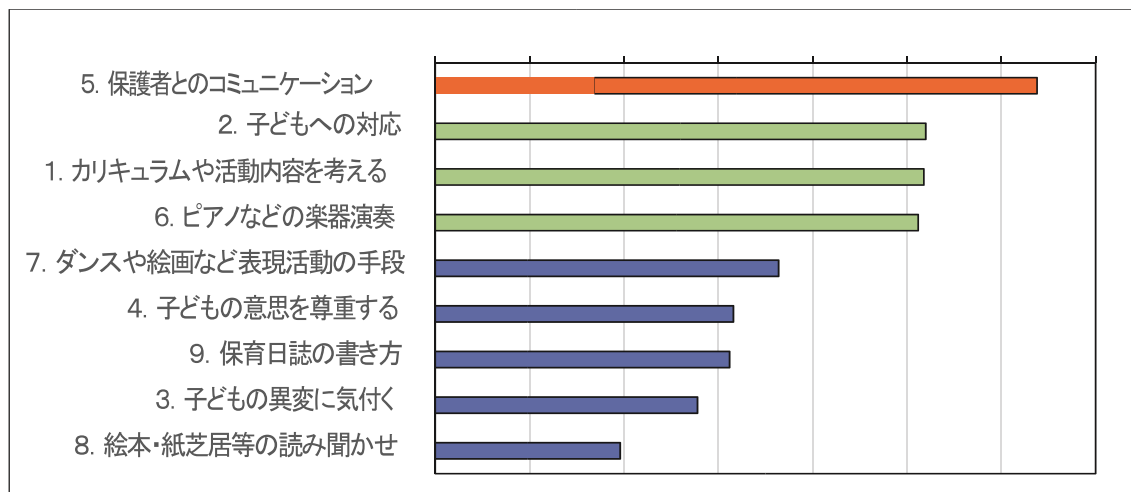
Q10—1 保育者として自分が得意なスキル



保育者として自分自身を見た場合、どのような保育スキルを得意としているかという問いに対し、得意である(「とても得意+わりと得意」と回答した保育者のうち最も高い値を示した項目は「4子どもの意志を尊重する」であった(89.0%)。つぎに「2子どもへの対応(84.2%)」、「8絵本・紙芝居等の読み聞かせ(84.2%)」、「3子どもの異変に気付く(82.3%)」であった。この4つの項目は保育者の回答で8割以上の値

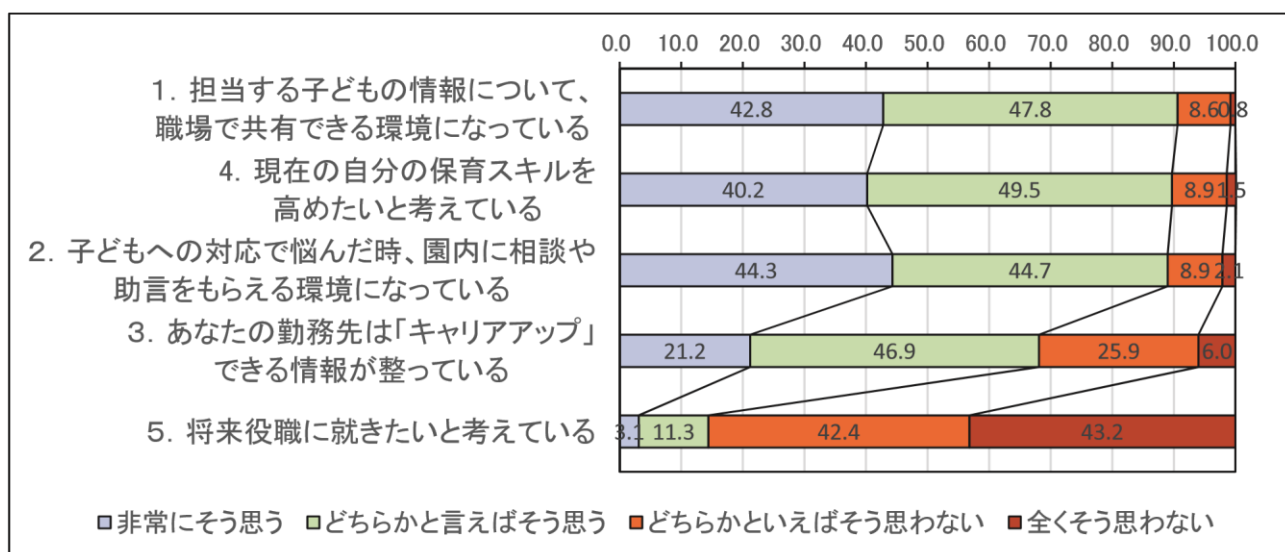
を示しており、保育者が得意なスキルとして自覚していることがわかる。一方、苦手と回答した項目のうち最も高い値を示した項目は「6 ピアノなどの楽器演奏(65.5%)」、「9 保育日誌の書き方(62.8%)」、「7 ダンスや絵画など表現活動の手段(61.5%)」、「1 カリキュラムや活動内容を考える(60.2%)」であった。8割以上の保育者が子どもに対する援助活動のスキルに自信を持っている。苦手な仕事内容としては、子どもの保育以外の楽器演奏・表現活動などの技術的なスキルや日誌の書き方などの事務仕事に該当することが示されている。

Q10-2 今後スキルアップしたいもの



今後スキルアップしたい保育スキルとして最も高い数値を示した項目は「5 保護者とのコミュニケーション(31.9%)」、つぎが「2 子どもへの対応(26.0%)」、「1 カリキュラムや活動内容を考える(25.9%)」、「6 ピアノなどの楽器演奏(25.6%)」であった。「1 カリキュラムや活動内容を考える(25.9%)」、「6 ピアノなどの楽器演奏(25.6%)」は自分自身の苦手な保育スキルをアップしたいという意識の表れと考えられるが、「5 保護者とのコミュニケーション(31.9%)」、「2 子どもへの対応(26.0%)」は苦手な保育スキルというより保育職が有すべき重要な保育スキルであるとの認識が反映したものと考えられる。

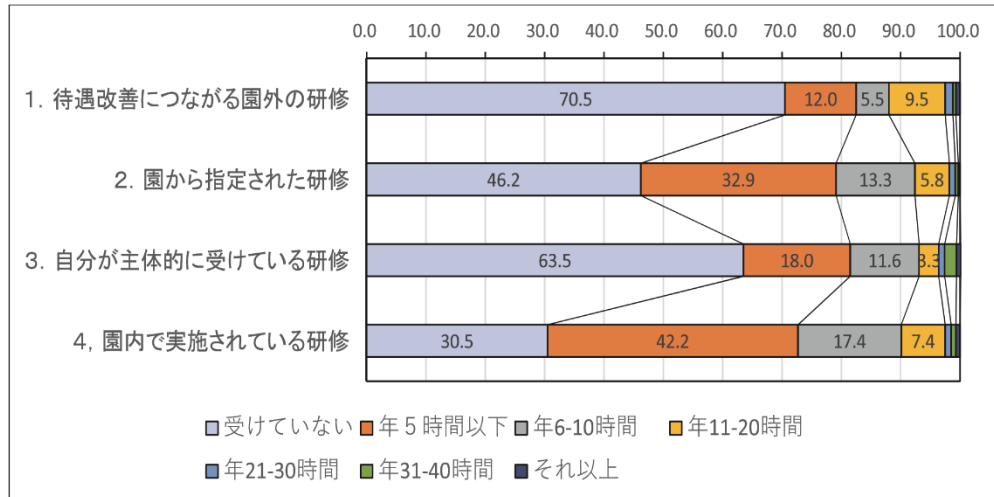
Q16 仕事の職場環境やスキルアップについて



仕事の職場環境については、約 9 割の保育者が担当する子どもの情報について職場で共有できる環境になっており、さらに子どもへの対応で悩んだ時、園内に相談や助言をもらえる環境になっていると回

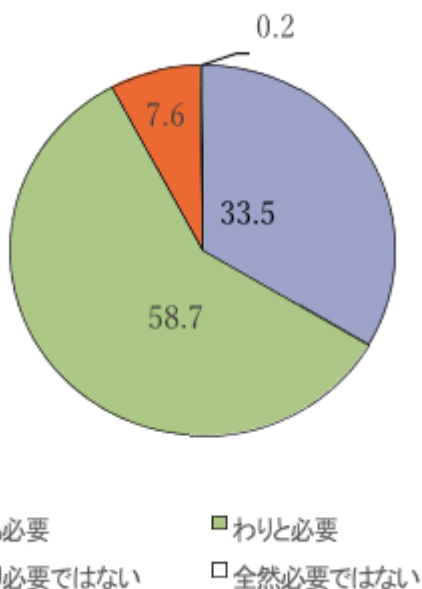
答している。保育者が勤務する職場のほとんどは、子どもの保育についてサポートを受けられる環境が整備されていることが伺える。保育者の約 9 割は保育スキルを高めたいと考えており、職場の約 7 割でキャリアアップにつながる情報が整備されているが、将来キャリアアップして役職に就きたいと考えている保育者の割合は約 1 割と低い値を示している。約 9 割の保育者は将来役職に就きたくないと考えており、その背景にどのような要因があるのか今後の分析が必要である。

Q17 キャリアアップのための研修



保育者のキャリアアップのための研修を見ると、「1. 待遇改善につながる園外の研修」は受けていない保育者が約 7 割であった。また自分自身が主体的に受けている研修も約 6 割が研修を受けていなかった。一方、園内で実施されている研

修には約 7 割が参加しており、園から指定された研修には約 5 割が参加している。研修を受けている場合でも年毎の研修時間は年 5 時間以下が多い傾向にあった。これらの結果から、園内研修や園から指定された研修には参加しやすいが、園外の個人的な研修には参加が難しいという状況が見えてくる。



Q18 保育職としてスキルアップするには、現場の経験だけでなく、研修が必要だと感じていますか

保育職としてスキルアップするには、現場での経験だけでなく、研修が必要だと感じていますかという問いに対し、保育者の約 9 割が必要と回答した。保育者のほとんどは保育職としてのスキルアップに研修が必要と感じていることがわかる。

金城悟: 文部技官、東京成徳短期大学幼児教育科教授を経て、現在、東京家政大学児童学科教授。東京家政大学附属みどりヶ丘幼稚園・ナースリールーム前園長。「子どもの成長とアロマザリング」ナカニシヤ出版(共著)他

アンケート設問 12「保育職としての仕事に「やりがい」を感じますか」という問いの回答は「非常に感じる 51.4 ポイント」「どちらかと言えば感じる 45.8 ポイント」の結果を得ている。両方を合わせると 97.2 という高いポイントとなっている。アンケートにご協力をいただいた方のほとんどがやりがいを感じ仕事に従事されていることが分かる。

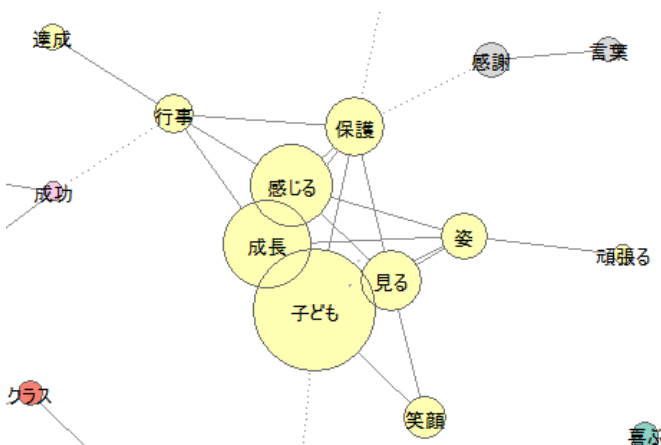
では、具体的にどのようなことに「やりがい」を感じているのか、自由記述を見ていきたい。自由記述内容を KH Coder テキストマイニングを用いて抽出語を調べてみる。多く使用されている語は「1. 子ども」「2. 成長」であった。子どもの成長が多くの保育者のやりがいとなっていることが読み取れる。記述内容は子どもの日々の成長を捉えて感じる、行事や活動の取り組む子ども姿などであったが、どの記述も日々の関り、成長過程を見守っていることから見えてくる内容であった。大変なことも多いが、子どもの成長を感じることでやりがいを持って保育にあたる保育者の姿を見ることが出来た。次に語の関連についてみていきたい。図 3-1 は共起ネットワークの一部である。共起ネットワークは記述の中で単語が共通に出現する語が円と線で結ばれ、出現した数に応じて円の大きさが変わる。下図の保護とは保護者という意味で、「子ども」という語と共起している。保護者とともに子どもの成長を喜び合うことや、保護者からの感謝の言葉などの回答が反映している。

抽出語数、共起ネットワークから保育者の「やりがい」を見てきた。保育所、幼稚園は子どもの保育・教育の場であり、子育て家庭の支援も役割となる。今回の回答から見えてくることは、保育職は求められる仕事内容や役割と従事する保育者のやりがいと一致した仕事であるということである。

あえて、もう一つ「やりがい」の視点を提案するならば、社会に対する視点である。(そういった視野をお持ちの回答者がいらしたとしても子どもや保護者の視点が優先されていると思うので「あえて」と入れさせていただいた。)今以上に保育職の社会的認知を高めるためにも従事されている人たちが社会における保育職の意味や価値について意識することも大切だと思った。現状は保育者不足が深刻化しており、この状況は「やりがい」を感じていても仕事へのモチベーションが持たなくなってきたことも要因一つとなっているのではないだろうか。処遇改善などの取り組みも進んできてはいるが、社会もまた、保育者の「やりがい」に頼ることなく今後さらに負担軽減などの改善を図っていくことが期待される。

得た回答は純粋に保育者として日々子どもと向き合い保育・教育をされている視点であり現場保育者ならではの言葉であった。社会状況から保育者に求められる職務は多岐にわたる。保育職は決して楽な仕事ではないと認識しているが、その中で今回のような「やりがい」を感じ従事されている姿は頼もしく嬉しくもあった。アンケートのご協力に感謝し、今後さらに調査結果の分析を深めていきたい。

図 3-1 設問 13 の共起ネットワークの一部(KH coder)



齋藤恵子:保育所保育士、認定こども園施設長を経て保育者養成に携わる。前貞静学園短期大学教授、現在は羽田幼児教育専門学校特任講師・目白大学・浦和大学非常勤講師 著書『理論と実践をつなぐ保育原理』(編著 大学図書出版)『保育をめぐる諸問題Ⅱ』(共著 一術社)他

<日本子ども支援学会 調査メンバー>

日本子ども支援学会学会長

深谷昌志(東京成徳大学名誉教授)

日本子ども支援学会調査委員会

委員長

河村真理子(育英幼稚園園長)

渥美卓哉(三鷹市立第六小学校教諭・子ども支援士)

大槻育子(東京学芸大学大学院)

岡本弘子(元フェリスアこども短期大学・相模女子大学非常勤講師)

小川香代子(武蔵村山市みらい保育園園長)

河村圭(育英幼稚園副園長)

金城悟(東京家政大学教授)

古野愛子(日本文理大学准教授)

齋藤恵子(前貞静学園教授)

齋藤二三子(幼児教育家)

深谷 野亜(松蔭大学教授・育児調査プロジェクト責任者)

松井菊乃((株)ワークサポート社長)

和田奈々子(こども支援士)

「保育職のキャリア形成についてのアンケート調査」報告書

日本子ども支援学会 2021 年調査

2022 年 6 月発行

発行:日本子ども支援学会調査委員会

日本子ども支援学会 HP

<http://kodomoshiengakkai.com/index.html>